後醍醐院製作

年中行事

特別
イ4
3163
220

貴
14
3163
220

ことさきはちらさゝせの世の長秋ゆくすゑも
くいはゝも川ふちの末までもいはれ流
なかれて絶ずもわかれはいまつしにきこゆん
もしろしるあこちしれとりむられ時ふ
いまさら大かたとも行末の鏡までいふくとも
この流し文字の世にも川ふそ有れなと
やその道理の流よりかい成なんし春の夜ふる雁
は内まつりなへてとまられいは流くとちしか
なくしても和ふる心根なれと末の流傳發業之も

とのもりかもりの女嬬ともさきそうしくはきまうけの
なるはついないかへて御のともし火をもしてかゝよ
凡てわたる程四方拝の御装束は東のよし半
おこなふ蔵人ども小舎人して掃部寮してさきなる
もとりてしたかへりよかり大宋御屏風庭に
なてゆるしてお庭を北向にたて娘子のもとの
つきれ枝を給そ これをさきこれはうちわたれ けれ枝をめしてなれはこそ
の時にみだれきの人々してお庭帯しつくなて御座に
黄橡染の御袍つけのことし清涼殿のこうろのかし

とあるそて出おかし御もと道とす 西に出る時は御庭とゆるそ殿の後しろよりてかくのごとくよりいて
きせ給ふ御座とは東よりみなみのわたりのこと みなれふくさとさして屏風乃
下にしてゐる人々におのゝもとの冬もさきを清中将
に剱とさして娘子屏風の下にて蔵人頭は筥をあけ
そ御川の北辰と拝せる庭にて二拝 属星の名をとなへ 北斗
天地四方をおかせる庭にて以後給御座の人々ほとく
出きまて天とおかし いの井ちにて地をおかす
子の方より卯四の方をむかしてふ二拝おり
御座のまくにむかて東に当霊庭をつかりて北辰と

おもてざしきに武菖をかざりぬ今年もし二筋ありしに
こゝろに文一ふさこれにとゞめく西にて拝覧あり
御庭にはみなあやめのかほりもとゞまり御拝そへて
いつも姫君人形御ざりのもにはあやめとかざりて夜もさわる
ことあるかなねぶれるねのこともいはすそえてかく御薬
さゝえて人々ともよろこびてにこやかにぞ御いはひ
祝儀人をもてなしいくまにて御めでたく御いはひあらく
のれたてまつりそめていれわたしと申て御いはひ
しらきぬを御こきぬ添へあり下付御つりなかよし参らせつきて御

茶につりまいらすべき御姫君人もかみあげさうぞくして
座にはたゝみの床のかけは御南のこし水のがくはかけ
かざり花さし中三方わたしは二方御座とよの
御はなわたりをかく本丁とそてわたしもちゝさの
御肴ともそえて一つ一つ中をひにわくるとあり
いつもありし御の代には本結を御せて所縁の時も
こうしゆく御ろとおく御座の御へはいらせての
まけのみんさされとうつきのこかさ文みんさ一枚
御酒まのつきて座とすなをひのめんのうしれ御床の

此御まゐりのてうちきて命婦女蔵人一人庭上に次
南の方二行にゐならびて円座一枚をしきて〈後取〉そんとりの
庭上に次典侍らん下女房みんな庭に候く女蔵人二人〈上﨟〉毘沙
よりれ某をもちてはいる一のはしにまうくいありこれもちつけ〈給〉〈盤をし女官ノ日紀に御付てしまうとまうす〉
これをさゝぐるなりのは庭にて此せ所また氣の方の此御扇
よれつ〇の此衣のへふきつ〇てまゐて出所る
〈きゝめしてまうす命婦　御前の庭上にて次の守〉まいせんのさけ某のうゝ高くとまうす〈朝餉　あまうれいそいれを次守句面門侍にとせ〉
外はまゐ此所をいせんのさけまいらせ内侍これとあく采女ひくい〈生氣の方の　女のとありて七〉
おりて〈内膳　子〉あ〈萬国〉まゐ所此いるとあ某給してゐ〈采女〉三人内庭の次乃

〈平鍋〉

弓はまいのへいりこれと御て〈刀自〉とゝしう給つよ此まゐら命婦蔵人各一人上
より次守まゐりて皮くそいれいのきん〈盤〉あれい二度んまわさ
おりなおぬは四人おり三人も内ふるへ下典侍次守に此まゐんまふ
此まゐるさ入一の此さんにまうさ大かうさ〈役送〉しきんれ此一乃
御さん方まうし江次守さ見くへたりてつゝきをとりとりて〈精進　盤〉
かいまいしとえものとくをむかまへてうへしなまへい〈盞　繋子〉
たひてまれられまゐうなゝ此さうさ入はいりてくまり〈菓〉
子置間よりす見てはしの某下のもとふさうつゝ婦
女官青璅門のつんまて典菓給りして御菓をも〈瑞〉

よるハ庭にて典薬のかミ侍医(オモトクスシ)宮のうちのれいさ
おの〳〵御はしこれを御むへ一こんまいりて典薬すけのま
一む次に銀器に入て本丁のおところひより御膳の間にて
まいらする尚薬まいりのかうこれを兼て張器のうちをとゝのふ
ならて典侍ハ御とこれを給ハりてまいらする女官に
て淺しん元とり給へよのまゐらせ一日ハ四位二日ハ五位三日ハ六位奉行
の命婦これときりてかねおかきて殿上のうへにおもたせあり
を乗つかさ弁官つかさハおもし補と例あるあり
さうおかゐんとりのみへにたまふとあり 大根ハふ女命婦とりて
おさきに御ちかへてこれとりて
ゑうんくの精進ゆゑにとり三献の御かハ夜のおとゝのおん〳〵しのさた

むかひてこれをあそくせりのうちこれをもちて二かうらさい
ぜんにまゐらするふたらおかるゝかんおりしんとりたまはるてく
こふおかれし三こんまでゆるしてあはせてはへ一度とふ
盤一こんにまいらす三日の後これにおなしたゝし二日
夜御とのより御座へわたり候世話て後膏薬御かしこまりと
なりて典侍さ二こん内侍にて入たり左右の典侍にて薬師のうち見ハ
しらまとかうくせりのうちこれをとりて御間より
御ゆわたしことにらく女房にわたらせ給こしゆるは
上達部うくれくせりをもて御んまいらする家あはするる

殊にめてたくさふらふはいのゝく家のらいはいそくさん大
臣ら下殿上にさふらうて始大臣の命によりさて出身
に殿上の座をたち小庭をへて射場石門をへて
鈴のつなにつきてまゐりたち上首の人蔵人の頭を御拝させ
小朝拝おゆるしまゐらするを殿のちやかん御簾
ゆるされて殿上の人につきてしとりいさしの御座のうちにたち
六位蔵人二人これをもて蔵人以上やの
うちにてもれくつをとりてをのおのたちまちの御簾をきくを
させて出させ給ふれつしまつりせ給蔵人頭出御の由

と大臣に申せて親臣仙花門より入てあつまりてなてふを
のまゐりてもよりの拝りをえて御座のうへにまゐりに
左右門つらくの人ゑふつまりたち門上二人のみ四位五
位ゝ志位に右門に位又もはしにおりいふたち
さふ御りて謝舞をなほ拝のくとし出よりたりたく
三四人ばのこして上首御遊より拝りて立りさふ
朔て出座をりて後入御て人臣は簾は靴脱ちは
てさされのとしゆくうちたちかさりいふくはさりて
あんきふえてうゐてゝ出しわさりきいはて御遊つは

はいせんには第一の上臈女房なり内侍命婦（進酒不審）なとは
くはゝるへし
（節會）元日節會内辨大臣陣の座に着きてのちおこ
なふ（もし第一人にあたりて陣頭の大臣なきは内弁と称すへし）蔵人を招きて外（ケ）任奏を
そうれ（そこのついてに）蔵人内侍に附して奏せさせ見参（ミシノフミ）を奏覧して
返し給ふ（出居の机にのせて少納言を召て給ふ）七曜御暦（ヨウノゴリヤク）を（腹赤）なとの
奏なとも内侍に附て奏し奏れはまた陣にいたん
下りて典侍釵を内侍に附て（命婦みてこれをとりて内侍に奉るなり）
凡内侍より（命婦）居（すゑ）事をとりてもちて額間にいたる
次内侍たちしりそきて（璽）（筥）剣のつきに寝殿につきて
命婦ともひさし（孫廂）にゑん道（布単）をしきてありしかしいに
紫宸殿は後地の（きさはしの）ものさきの（上）下にてこれをもちて（うへそ）
（たゝ）蔵人をつかひに近衛のすけともちてさふらひ命婦上そ
のすけ二人釼璽の内侍と命婦ら（たゝくそえ或いふらす）関白となりて
の二人の（ゆ）へおさえひて簀をさして裾をとる蔵人
次はさらひと（草鞋）をはき関白裾（キヨ）をとりて人々しりそきて
これをみれは（？）これをこれ命婦四人蔵人
四人もともに威儀女房とふなとのことしを（？）居

障子より出て大床子のうしろよりひさしに出て北方に
ゆきて上は後よりつき給て御よそほひの南の御はしまて（侍子）靴
をはきて御つゝきて右近陣をへて威儀女房は御後（ゴ）
陣のまへより東ざまにまはりて左の階より掌侍（ナイシ）剱璽（ケンシ）
以下御椅子の内は東の方に各の人々ならびて内侍階に昇て
璽剱の筥を御座にたてそへて威儀人（左右）戌ノ菖以
右の机におきて上は椅子の下に侍子に候せ給近衛の
陣をいびちの方閣下以下に裾をとりそく（此をかたはらにて其の／ほしたうひは侍子の人々と）
こしてゆくしろうに内弁陣座をへて陣のうしろをへて靴をぬく
先をたてをとく

これよりさきに諸卿外弁に候て内弁宜陽殿（ギヤウデンノ）兀子（コッシ）に候く
掌侍左右東の床の南北に候ふより西の方にすゝみてたゝみ
出御あれは内弁左右を見めくらして揖作（イサウ）して内侍にむかふ
威儀人これを見て内侍は二人ともに椅子の西に候して（通障子）
くしの内（通障子をとをり障子と共に人あり／いま一人大刀を持して障子のもとに候て）床子（シヤウシ）二所にわかれ
候ふてさゝへて（候ふてうけ）内弁これより出て（一位は二方御／二位は二方に）
きりかきみて極りかさなりし近陣の南北にわかれて列に
すゝみて其門内弁すゝむ右近衛の陣を出て内弁に
家礼の人をとりつくろひて一列に揖して内弁出るまて

謝座(シヤサ)二拝 おわりて又一揖して ゆり入 わらひは再拝して二拝一揖するはいふ 揖も拝もおなじき式なりと略せる 半もわらひありてしかとも〳〵のち略したるも 足ふみのさだめのことはさきにしるせり 太刀のさしたるもの下にて略せり 手のさばきもとしよりなしもわかる

揖の事は前にくはしく記 揖りてさきにしるせる時々わかち 堂上人のわりてえしの元子

次に庄の人北方より入りて開門つかさどる役人

左右近将曹門をひらいてつかひらくさしはさむく

兵衛のまうりかよし 陣官えらしのつかさのつかんまて

これも内舎人(開司)ゆき舎人しる庄よりよりん陣官文

を持ちつかへて闈司とつかさ下よりさしゆりまいりてかし

庄よつきて立ちゆるはいて内舎人にゆりさらして二拝(おわりてとちゝあてもにきとちゝさそ)

大臣ゆりいりて少納言大舎人女納言(縫)ゆりいりて

あそつん庄(うしろより庄にあたる人 四位以上人なり)内舎人宣旨ちゝきんそうそうせ(奏進)

少納言(称唯)いをしして出でつり出御舎人にてつの庄のちかう

より入りて次将つかさ(標)ゆ庄ひ将一の人揖りて異位

重行(テウキヤウ) 大臣のうしろにあり納言そのうしろに二位の中納言そのうしろに四位宰相 二位中納言いち納言のまよりわか人三位宰相いは中納言のまよりわかりあし 列

さゆりて内舎人(版)の立ちきみん拝庄謝座に二拝をつきつきぬ

つこ形廊よりすゝみて御弁将一の人揖りあはしてりとよりて

いさ庄のきさて簀子さしてこれとこさらけのうえ ゆり入

はくらのまへのもとよりくるゆかれにて謝酒(シユシユ)に拝と拝達へ
同じ謝酒とよりてさかつきのことをはりて盃をたまはし
なまゐりてこゝ入和舞の人とゞ御車よりきたりて堂上よの座る
南のらんかんにゐてたのおしはかるほどくる時いかのらんかにひて大のおとをなす
すなはちの手とりやはらかうちへをしいられも南と申らひなども
あり太政大臣これをしるはすく親王中納言おくるにいたりて
次又大中納言人数おほきさかいはいかきるをこゝにいたりて内弁
は膳と濯ひて下殿してこれと従て内膳のことに南階の
次にむきていひちは声かけて拝たてこれよりさる
よ拝へとみて楽しもよはすく後退のゝ拝へ御

次に厨子所の中のはん二もちてきたる酒膳の拝へ
あまきん 盤いきんのおしいとあちんよりて二方ゐうをあくれ
きんよまへてこれとゆふろくて宛毛とよりれきいきんあり
わりだもしいんなしいおすしくわりは下きいきんくる宛
つゝいゝ拝て酒へなりそれのは膳四種ゐ下八きん従ゐれは
やそよ腸のはせんと従てとし拝とへて内弁もよ御ゐ手
は後に織事やはわ腸のは膳て 蒼鷺
へん其のこまてこれともより おとゐおやとをは膳のくさく
其の名いわれともその姿いつれとわかるゝし内膳おたし

ふい濃き所ねまれてんをいはらかにこそといふしん（心）
あやしの御かりこんとむさくへいふもちつかる御かれいさう（餛飩　崇　餅）
先そんもおかれかうし内弁陛下のえとむかもよ
おほく大弁宰相つゝへてちいさまうしいはこ参めして（内豎）
締ろかり内膳こんとむとをゑおかりて大弁宰相ゆきうを
中内弁中気そ守て内弁天気をうかゝひてくろ（箸）（うちそしくい　先さしそ箸）
てはしのさしれ　よをおとほかり（蚫）　あはいのわかめ（参春）　たあつものとふ
陛下ふかこれよおうもとうかり次わたものと添えて（慈）
進ミ（ミシ　モワシヨ）不淋しあそうとり記そもと酒て例の（高盛　平盛）
とく添えとりて此のかしはら経へ内弁よ中内弁そん（飯）

汁（けん）あらなもよおかさしむこんとむのさとしをへとそとりうつ
大弁ゆきうし御中（化我中への汁を　とふもとそ）内弁参さんのさとし
はそしてろさんのさとし化ある中ちせてかれ
も　箸　かいそし御中門（いはの代の）陛下あおしくそしとこん酒こ（とうかり）
三節のみれ添えして（酒）坏一こんと添えてこれも本儀よ候せて（献）
とつうろそしくおすあろ陛下一献（太はさんのさとく罷もあれろく大弁　あきとさきいまも念のさいし中下）
あともよおかさけのうきさつれとも門内膳へいしとも添え（銚子）（きとし）
此のんへのまへあてさけのうきうまもて平とともあへてとおく
酒くむろこおくの所い内膳のうきさる所きとともさけのか

こゝにおいて　内弁座をたちて軒廊にて〔国栖〕くすをもよほ
す吉野のくすうた〔哥〕笛を奏す次にかはらけのとく〔おはり〕次に二こん一献の
こくとき座にて内膳の花御さてき〔殺〕いくかん〔局〕して奏して
云ゆるちりんしちにみき〔御酒〕たまはん大許〔次目第二〕とおほせありて参議一
人をめしてこれを仰せ奉る人座をたちて補唯して其より
内弁のもし後にいくかんして座に内弁仰せらちりん
すゝちにこれ座へ参議らを座をたちて軒廊よりくり
交名〔姓名〕をたまはりて三へりのかる南の階れこまとろのすまし
きしのつんまてこれを仰せ一揖してあさくぬく二度

ありこゝにて以おり座よりつゞきて次に三献一三之よりおなじ
しこんとおりて立楽おの日月花門よりれ左右に人
春庭楽と奏して軍道に御むかふ左右ともに　二曲
万歳楽地久か殿喜保楽おもしめしとのちよくゆよりてこの比ともく
三曲もおりたまちちうころハこの事おし尚代ぬるきよ三へりておほされなき
舞をおはりて内弁くくりて陳に座く宣命見參と然
をもて内弁文杖をもちて東階とのかたをて東の廂の南
のなよりへてあくれけるを西へとれて御帳の東屏風
のもとにて座内侍右にて屏風のはしより右の座にて
これをとる　くゝの〔手〕ひしてハおうきをとる　御帳にはこれを御覧に〔井〕て井さりよりて

此花の上卿よりて此杖の方へいさゝかむかひて杖
をとれは次く奉幣をさしよせ上これをとらせ　給
て右の方へ退くなとらせ給なの次にて杖をとりて
まとひて給　内侍杖をとりて弁さりて去く杖をとは杖の
へりす
束ね此杖奉幣下よ井へてとく
くまへしさる杖へ取りくろきつ参いまよ　内侍奉りて進て宣命早く
杖てとくやそて無しくて来へきもゆくこ
おゝもしこれを此後し給て又内侍へ参よとらせ給ふ
奉りのさ給といさてゝ杖よりさし出て取り内侍これと
こて次ゝよりて出れとる　杖よとり

杖へてうくまもちて内弁ほ返したるの内弁内侍とは
次程といさてゝ去る也とて大刀はきりと膝子ほあてゝ　之
取り　の道
と下て持廊よく取りて杖とそしはいて弁ゝをもちて
出る上の取る参議を出して宣命を取ゝ参議内弁
申し次よ出てみてといせらして次の弟とさ出るとく
して弁ゝを持て去るくわとり杖へて本座へ入る宣
命もちろん内よ大臣よも礼とくさるゝへていま大臣の
よ次弁よ八字相さしいそぎ次るも内弁ゝ下よ殿上近う

の南のへんより大納言以下まゐる始のれちのごとく
異位重行ゝ宣命使下殿してまんらしやうすゝて
進てのしろとへて日花門の小ねのひとまへありてはし
してこれを曲せら の揖とそ 西におれて 庭に入るときは西より めぐりてのち揖すへし 宣命の版の南に
浸る氏冠のうけの版によりて揖とへり揖して笏を
さして宣命披読まゐらせてひさてかわるを婿をし合
て右の方へとれ拝し再拝又さぬのごとく宣命使も拝 副
舞も宣命使の由を御前に申して さてもとく 揖
と拝もの後の版にわたりて あまたしわたせ給しはての後へ とかへもあり

あらば様にて右へ出入りてさぬのごとくありて曲折の
いさきのことし 堂上の座によく拝へて入りの出る宸儀
はなしぬ出御して入御大将まいらちも大将なくは内弁
これをとりぬ近衛の陣ひらそれ女房の座さいひらは
たとへ一人陣るありとおするいひは事に内弁 己下ま
しとゐきて陣をゝ門 宸儀入御のゝち己下ゐても
此女房ら出御のこと
せちゑの後おきえたるは内弁さしおろして御もとに候
主殿云此後に歳事やはさしおるるとらふ女官

さら御さま　おうつりゆるりと

きんり

あく此たひの人々ハこなたのおうへとハ親王かたへハよ参られ

大臣内侍かたも七路こその外ハ中間をさるなり

本殿に還御のゝち女房たちハせんよりて夕御膳を供ス

日本中絶

二日二宮大饗（リヤウクワン）（キヤウ）なり玄輝門の東西の廊にて事あり

ちかころハこれもたえたれとも此の儀をこゝろさるゝ大内かといて

きこて中宮春宮なとかるし此ハかたハさるとてところかされ

あんりしさしたる事もあらんとおもふおもひハかんたちめ

下ても御しゆるしさるゝ人殿上にさふらへハ臺盤所より

給して此日ハ女ん（わり）女房ともにたかいに下女房の

御方にハ扇をさしたりよせわたりんたちかたへよし

入られたるおりいちふ扇をそひくらる此葉の儀略日は

ありし三献をそて大床子にまゐりてせ給ひておし召れ

おもの御つきもいさん此葉にありそて其らの女房文

ハおかし

三日もそれそれ春宮にもれくまりの此ハありしきハ

きんいきたりへ此上﨟女房あり之日に御會に此え

服のくらいゆるしのおり給へきれとその儀なくハのきんハ

御楽のはしまりてみこしんをとりおろし ひしやう(平安)の御座
にて御いろ二三日おかし 中宮はくもりも同事これ
まんいもとよりなまる様はさくらんに御所の御のまいり
中らんにあくはをいたんいみしくきかり両道の躰おハい
おもくなりし(侍醫)一人御いるゝ二三日のあいだ毎度薬ん
にんおくに(中絶)書をとしさんきれいはのの御所にて御えんも毎度
ともしいうん文枝にてきこえて 参内御つかひ中行事
障子のもとにて左の勤(?)ともくし御勤文ならて補佐して
孫ひさしにそくし御所の奥ぬ中の御簾を両壇さて二間のかたはし

に膝行(ミツカラ)あそはしのかうりて参られとあをて御おにに
く毎度のとを経て御ことなをしまいらせしてさうし故文
にお御はんをとりて御法御衣文はさまにさしおかしかみ
紙ともろともえんかうに次下の座はしをとりてかのはしまて
御紙のおくとひらきて右のはしして中の子をはさみ
のさしへひきおさしして右のはしてその御ふところへ入のはて
えんかの座にはひきつれにて上の御座におはしくさして右の
はにの下御の文ともなさてなをのはしていりきて
御次も御次しそて左のはしして御入をそて右のはし

なを川にてあそのくしなん給ひおもひて公のまへして
御つゝきたれのまへそつき紙のおくよみて　二あるにハ次年月　二の御くうへし
ひまはなかつしんのまへしてまきて右のまへそなはは
さへてもなをてさきのやうに御こゝろへて御前にてよみて
毎枝とんにかきて　上ことさ御のもちくにはなはは　あそさ御よそくなかれ　騰行しして
さみよりて文のされとんにして御へて右のまへして
如このもとはかとり御ひしてもちて之後く本座にて之
卩んを氣をぬまそてういそ様帷をとりさ御よ文はなくなり
毎度はさみにひく文とかきんなり　文は枝をとりてまへて御くりは門　文のうへ耳なてさ御よ枝

とくのかなりに二さ御まもさなり
殿上の劉解おり哥人ゐる下てよれたしそるあのこ
こもさいそんよなく小座哥人きんよいて勧盃朗詠
二首今様一首三献の手気あよくらの哥人きん
そいたれは次てさるこれとさひあるよくんしていもと
さ川そは肉にふかくこぬく今様の後乱舞よくとよぬ
さるか座かりしまぬ小座こそてまきてそ哥人沢
三度なりれはしの御へよまことは御ふてともあり主上
もちとくより出御そ女房なくわまて渡子のへんよ

さて御車にて中宮に推参まいらせ給ひて北の陣の御おりし
給ひての御所にて見きんをいまさのみかとへもて
ものかたり
叙位
五日叙位儀あり大臣已下九仗の座に出て座より座につくに
さふらふのまゆに蔵人頭已下戸文をとりて内侍をして
朝餉
後おさむるまて奏聞のあり文は御覧して給ひて
らる已下右をいのまへまて下給ひ文をもと揃
そのへて次のまへに入て此座の前に召て清涼殿の御
簾をあけて見の御前の文にわたして四季の御

屏風を南面にたてて置しして二人の御前を御座のさ
ところにたてて北のまへにはしけるは紙の内座にて御
此座は西の南二間を外は常におかれて上達部此座
とて蔵人頭して給はりの座もひいてはつきまつれこれ
こ給はり御前にて見へまいらせて姉沈めまいらしこ大臣大
外記して宮文を給ひて三位の二人宮文は
おして日花門より入て宮湯殿のたんよりはこの御門
大臣已下座をたちて階下をへて外儀は堰弓場中まてはむ
大臣南にしけるにて御門こみかき納言中をそれからに桂の御儀いりち

小上西(西)なんとう川参議宰上小西かりもこ文の御紀之
の庭よとう川(小上西面)弁白いそとり殿上よりてとく(刻限)きさんよ比
おのかたよりて大弁いしして是むいさ大納言已下こお揖し
大弁着座のもち大納言筥文給ひて(六位が硯のさぬつみて これをとつて)
右青瑣門より(いさとりきて のあ)入てまこひてよのあるはすそよ
持ひて次第よいそらゆふよりて執筆也台座の通へ
よ硯のそこそくえ次のおれひさぬつふて膝行
して次とよりて硯を地よをきて右のほりしてたて
さぬに参御して硯の下の方お重座なもちそてさしよす

さえ(逡行)御して いさてらは座の方よむきて笏おぬきて
弁かうしたまあくりて左りおく見よの様を媒とかしそ
时荒の人廊のとよてむ次第よ筥をとりて此方の
座よつく一の大納言は筥文をとく依為人ハ前に往
きて塩は簾をして人を着座せやとは次して大
臣を依に寄ちて給らる大臣 揖唯して揖して
まいむ大臣笏をさしちそゆとくと給らて 时笏
を置て左のよりしてこのそことをとりあけて硯を寄の
ほとにいきよせて硯のほとに筥を置て文よ給次のそこよ

川をて十年労をつりぬのこして労をこして菖を捧て
勝郎してきてこそ見きのもとみてそりをそくしてかの方
ぬ此丸なるひみそれは盾の内さこし入大臣にてうちくりそきて
労ぬぬ乳て此十年労ぬは洗して出し給菖ありる
は廉をしもろ大臣労をさしてきてこそては廉ぬ
いそくうちにろあるてえこぬ出し給ふさるたふ入りて硯をも
この所にふそりふ大臣労を出して此文とくと給あり
大臣をみとそり筆ぬ於む院によみそくこまあるか紙
ぬ二巻ありし一河は取あげてよ見をあねてまきみ

てそか浩いいくり河そりと郁ヶ給の人かりと給らるも
附於の程をそろくひて大垣め給か々かく二人いつもれ
往をて取て成りか邸ヶと叙をはるみそんまいあり流（勧査）
（常陸即参議給こん不審女叙給にいをまわりと）
宮の北ヶ文かしよつらそさけて奏勅許の後を清ねと
然してられと給を御ヶ文をも捧てまいりぬれい是をて
ア七奏はみそ十年労奏せる所のことし主上覧と
こりてそのしかいぬかしいれか筆紙と川とこりて
上﨟の北ヶ文の中よりのこりぬか見給をして返給ふ於於流
硯の菖けヶ文ぬくてし給関白左よりて給て次第

そのゝち硯筆をつけてふかく加階は小折紙にかきて
公卿より殿上人なとは氏のしやく（爵）なとをかく
叙したる折紙に書合せて階級なとかくりてさし蔵人に
清書にうつしとらせて年号月日なとかきてさらに御覧し
てまうしに入て奏したれは御覧して返給ふ大臣殿
ことに出て清書の上にてまさへて大中納言の間に上て入
まいりて陣座につきて参議に仰て下名を
くはしむ又大内記に仰て位記をはしむ位記を見て筥に
入て奏せさせて清書をしむ又後文請印（シャウイン）をしむ請印と

よりて奏するは御前にて度の奏と云式部兵部二省に
わかちて（式二と兵をしるす）くらへて下名紙に
して奏して蔵人にわたしてさて七日節会事をかく
わかち給ふ

節会

七日は白馬節会なりこれは昔はまつりこれは歯への
日より日より御て南殿の御装束をもつへきにつき紀
文に内侍して装束の儀をいふえりもなき候
ありてこれらは様はこれ相南殿の御座をおきうけ
つかれはあらしをもて御帳にたひとつかもと（母屋）の

かへさるまじくは右のごとし此様ハ三方わけて　きはしらかけ　ささかきとかきて
うち箔ハすなはちらしにて平文のはし縫なとなくそのはへに
大花門とまへ入りはいしの大きさに札をさしはさみ
らいの方ひわりなれは鍬重をつくり右りて
式のところ銀金し文と蒔る文とい右札にさしとうら
へ入し大ひ門の前に畳でいらんと大門まと蒔地の南に二
丸柱といらんとてさ蒔　蒔絵の入内のそうし板をそて南と
くへちのせいはまてこれをそくらおもらんのお木見有
大おる此様のくさしをもるく色と入てこの作基に名

これをそく地の上へにたなよせてうらの下はらみよりて
あとやの説んりしころのへ四足の基盤をつくりて立
おりし姫来に八足凡そいらん一折る門　ゆるさいぬいさ蒔にて　ゆかこそ庇のおりまいにて
ささらも　下にゐの布をそくらへにくなもとすへおりし姫
備着　えしらいの七いそく奥はまこれとそく奥縁に元きおし
左門親王大臣の本しあちんのおとて納言はとりの
おとて参議の庇におりへ去廂子おりし此様のうしとその方
公卿人々もよせて大家の屏風と門内弁この
下にて奏のの内侍につくるおり此様の四れのた

つれて通障子を二枚すへさせてそのかけぬの内に 二
内侍のたんとはしくいさし九西二所に酒臺をく
南階の東西にん右近の胡床をさし内宣命(センミャウ)のへん右
常乃版はそのこしへんの東西に侍従の案をさつ 東式部 兵上階
式二 あるいは装列の入御その後胡へいのそてやしおとつ○のさ
く帰らへし南庭(ここかしこにさて)舞臺をさてり 拾やおきぬ 舞臺の
そこもとみしこり ものよろしくたた大た冬談ほいりぬれいか叙わいえこれと
これは猪ろくへん下右をもちて大たよくこれ大た
冬儀よ御てこれをうき入出年をやりしへとはいりおつ

はりて外記たろうつきぬかさし(代官)しいはしめなりやとおれ
それいはしそいまししとかられなりさし諸司をとふて
常にとし外任奏しされて後よ出御ありて叙位は
えはしるよそく式部もおすし蔵人侍従のそこね
内弁をは九はへの叠座のこへふそく式のへ兵たて、
式二ありは二と うへふてへし 内侍侍従の莒のこへかる下右をとりて東
階よすむこれとりされよ従て外弁よ所く 内弁
宮陽殿の壇上九へんよこ門然後出御のしぬまく
と清の陣いひく外り内侍東階よもなろ然見て内弁

たしのとくにありて下名をまうさるゝ内侍これを入
内弁宜陽殿の兀子に着きてちかはらを給はりて二行
内豎御前のつきつきのもの侍從式部兵部
六位蔵人つねにさふらふありて内弁の召に武官ども左右門内弁のつ
つきとゝめては稱唯して私ありまうて立ち給ひつて
下名をたまへる本列につきつるものつき文奉り二
首の座にもてまゐり給ふく内侍文を東階に立てみてさす
大臣稱唯して外廊より参りすゝみて謝座とあり
て堂上にのぼる大臣ちかきまゝを給ひて二拝す内豎さ

くるはまのとくにありても御前のつきつきのものつき
給せ二首の擬代様の木は下に大臣かしこまりて式
部擬代 堂上 堂上より参りて式のことゝ大に二行いは
兵部にいれたる擬代座にたまはとゝ立て文ゆり給
いる文一のところ給文つけもめつきられ擬代はいりて
たことを給まいらせさのとし一二首ところ座にも候せてとあく
宴にこれてたりあく内弁宣門御せ聞司にた縁孫
まゐらとしる白のとし諸て謝座謝酒をとりて堂上
此座に着く内弁座をたちて叙位の宣命をとりて

えりのぬりて内侍につけて奏せさせ給て杖は
えたてゆりの御所上臈わたさるれハ中納言の中に宣命
使を召さるれハ参議されと大臣参議
再拝て叙列（ショレツ）を召て式部卿代叙人をめして南庭に
まうく輔代ハ葉のことくふたゝ叙人ハ檀にて宣命使
然しるとりて座をすゝめて宣命をかまへる大臣も下殿
宣命使こんらしよりおりて曲折の揖して西に向
練て東にとを行て式葉二あるかりくたり つくに宣制の〻
え日にみえたり継壇のうへにて二拝し叙人ハ拝さん宣命使

のかりて大臣も下おりしくの中ら式部の叙人をめして下に葉の
まうて位記を給たる輔代これをとりて葉のうへにおさめ
給さて拾ていさゝかしりそく記たる揖してたりそく いとわりなくあり式部かれよりくたり
云ふにとめ新叙のつかさ〻わたる ことに二位のつかさたり代かハ二位のつかさかし立
わたるこふかねまとりそく輔代たりすく二首の叙人
まもひとり人わたせて北道よりそうて一同に拝舞させ
次中にたりすく大臣も下殿してとのしの拝舞せこれを親族
のあとは議かハ階給る人〻のよせわる人〻と候ん かりとの代わこふ立かり立候宣命の旨のとし 次の大将下殿して
外廊にて白く列の奏御とうられ喚たてまつらくふ 次将

笏を取給ひ酒月に仰て文を杖にさしはさみしむ左右
府にまうしむたとしたまふには右衆の廟にをはりて
立大臣一人わかれは右ともにとる大臣はすいは内弁これと
きは流ししてまの机をを給へ白まうわたさう又尺
次に右のあ(フス)のう(ケ)けとめしわたる拝の人なくは代とさらく
次く酒に(膳)せんはいる三節しえくゝを二献(国栖)きの(御酒)勅
使三えんとなしえ日にあかし其は女かまかり三献え
て内教坊る雷下殿して(別当は大納言中にあり)奏とる次は取
川く奏れは達へまくはる白まる奏のとし近衛の(?)

とゝのへて其後奏して舞(フ)妓(キ)舞台にのぼる又
曲は(皇帝 桃李花 喜春楽)其はてゝ宣命見参ありて元日のごとし
さんごみしと宣命使は座を起禄(ロク)法(ホウ)と太弁にあたふ宣
命をはて拝礼禄不(禄)よしむ上禄をとる大弁の宣うけたまはる
ま給くし入御のゝち白馬中殿の前をわたる神仙(?)
とをりて東庭をわたる又禄をとり(紙 絹)をことや いとなて
七度庭をめぐる近衛官人もみなくのおのにても
出萩女のつんも給りてまた馬をとゝ流れの中へおくれ
なし中宮東宮にもおなしくはいる節会の(?)乃

陣にてけんひゐし（検非違使）雑把（すけほこ）をとりてに
卯日にあかれは卯杖の奏あり六府杖をたてゝ御門
あつさゝと不生気の方七獣のかたちをかきて卯杖に
そへ寸様とのはくりもあり臺盤にすゑ奏す中宮春宮
おほむ春宮より官司を使にてたてまつらる殿人
孫をとゆふ六府にて奉る卯杖を取ていの（居）御夜
おとゝの御性四のまゝにみえ給ふなり（中絶）
八日御斎会はしまる八省にてはしまりて上へて参
しらふ

（後七日法）
真言院の御修法はしまる後七日法といふ阿闍梨ゝて御
衣かつけをなけはしめて御衣をことに入てあそのいまて
（太元法）これをいふ　太元法はしまる此衣かつけを奉るなり
（今代不行也）女叙位ゝ満年にありとも此内蔵たれ申して様の下に
来ておはしてまつりいの御座に出させ給ふしたりて
大臣孫廂の座にて御前にいりて硯紙とをすへおくとも
然して御前に叙位人もちて御いる申文を持て御硯の
そこにはつまはさりたまふんてんおさんてんきたりくさの（編）
申文なともありて今の世はかはりていかにき事ありと

政をはかせて此外に典侍掌侍命婦藏人中宮御
給ひし物をとりつきてまゐりて奏せさせ給ひし返
給ふ位に任ぜさせ給ふ人あれば叙をたまはる此
位記を作りて奏せられば太政官にたまはりたる給ふ次
の日内侍之をしるすによつてなりとなり
踏歌節会
十二月よりわたりありし所の除目あるに取れる物の日よ
成ねれば以下五位藏人をあつかひ中文奏を申す御
内侍持ちてつかふまつりて奏せず叙位はつかはれ右
よいのもんよてこれをとる命婦たちきこえさせ

のへてなんしつくつきを納めさせて硯のふたに入てさふらふ事
給ふ二合名かへ國々任解返上示さる此を奏しておく短冊を
則も親王巡給とらふは四ヶ代またしも代々を一代つ
一年よわたしてかりて此々さは給ふこれ文短冊を作
りて記史持ちていのちまし御申文をんとやうに此の内給臨時
給ふ二合して京官御ト命婦といふ所に納めさせたり太政官の
つくにる文あつし太政官藏人目録をとりこさせて硯のふた
よくいふなり御殿の北の装束叙位にもなをし右近三
枚をあてて右門大臣の座をあつして次第によ大臣已

下深の庄ゟゆしなさこし次なそこれを右大臣(宮)こと文も
四合之中ニ其ふ出む役人ニ叙位ゟおゐしきれいさまて
壱万弐千上近ゟ流れの本ゟつ統かれいこ申ゟ御
らゟゟつ紀て大臣台庄ゟ流く次の大臣二人等しく
えんさゟ流くとくく御らゟし時関白殿 友の関白もと たなしくり
以奏は十年労以奏すゟつとし これゟて
三権官二人らんわらし御ゟより一て黒とすゟ弟ゟ堂ゟ
大間とふる硯のもとに此下の方ゟよこさ様ゟわる以
つらきうくを引て硯統て大間の紙ゟ堂統て大間を

硯のふゟをふゟて紙のおしをおしてこれを上ゟ方ゟし
そうひ流しさま様よくるおりくり様筆ゟおろし
ろけもと大間は紙しな二人いりひろきて文ころ
様よ上下のすなひ統てあく継ら河弟しゟおりて
そりゟけてくちを取わゟはくつ統とゆ堂してとをて
あさろ方御筆をとりつれい文おり紀はくつ統ゟゟわる(かみそ)
おとのきてあさなる所をとくへすさそてつくさとしおり
にうちて先ゟんとりふくさ(かみのつぎ)統なる以返様ゟされい右此れ
名とさる所ゟと紙ゟ様よくりをふゟてあくをいひて々の

らしてもまつくゑ御とれの柱に向きてかへりとし入て
ちく代をすけし二三枚いら〇てありかぬ所くゑことを
おり折一の大臣あって次の人硯筆をあへいたし給ふ
度よ所にて御まよりて硯筆の所へ持く下さる〇の
ありし人なりぬさて前へもちおらうかくにあて紙とへり
とく大なるさかりしくに釈云わるゝ硯の水に御〇てしれ
酒入ありこゆるそしのかく御まよりて墨を磨る
たゝみして硯の下にさへて去るかくこれをたまゐる
はおひとく一と云の儀を見りくらつり筆に家し給て

よれをひち手紙のくへなさしおきてとくさそて内覧下
下の方ちかくおろりて清書をこれを猶も院宮の
御文とりにつゝくさ人を参りし御気文ありて気儀へ
人を見してこれを御覧にいれる硯のそこに御文をさく
さる関白給てあるるとく関白ゆるねをとりは職人に紙
いゆり見しして大はやみにおきてこれをつくれるこのかくのさす大
臣硯を下を蘭へとしやりて見させてなまゐる関官
状のこしを気儀御文をも扱きて気てたてかみの所く
さきれい二三通の御文ともろとも門大臣これと奏に

ともしかきを紙にさせて遊し給ひしおりふし半紙を
あれは〳〵とものたえ給て其上に居くこの名 昔
こともなはさね程に中文とくこれ関白殿になりしに
はやとよ紙に内壁のかみり参らし枝出てくしく(精)
ありて捺書(ケツシヨテン)殿大とじ(合人)をも不ふめしおそりぬ或大
墨捺りて捺せしてんをも不しも紙に内綸旨給ひ御身
また御筆へ紙と硯の石を紙てこれをもたし当年給も
おめし二合ハ三合のじとんかへつしく綴なく書給若の国始
合不とんかへつしく出てと義とかして御紙よりハそ

御筆へ紙もとも御そうて大間紙御紙てかをを紙ゆふて
かく紙(紙)捺りして捺ゑて墨を付く大万御(封)しても
はかなき入成(成)り柄(柄)かは三人をもりになりて御文の半
文のかまとうに二のそこに入ぬるともりて四方におもて
二三ゆりて紙を捺りしてこれとゆふ物をもちかふるき
かく紙捺りと物くろに用言をもちるく捺ときて
次第にさしてもそて物はくりにて紙ありて
墨をもく大ゆに入食して内へゆくつなく文ハ其儀
弁御とかちれへしくとへしも大臣たちたる後に若人

おくりて御覧にそなふ。しかうして後殿上人出つと
とりて勧盃のことはり若人にかつくむれいのごとし
第二日於の儀は日よおなし大臣はおのゑんさまにまて
節をとらしめてはへる大刀の音とかさなる音してけ
簾をおしあける様に御簾おりたゝみにかけるふとかくの
ごとし大臣これをとりて給闕安せさるさまにしおなしく
七夜もこ客よ参る大臣くり御みに率りはれいやかて
中文をすゝむる下かんぬつき文にもいにかの紙にてくゝぬ
参議より[illegible]の中文をも御覧んにあそはるとヒ[illegible]

まいる大臣これをとりてあなたにつく文と七夜の中文
くらしんにえむ大きに二日三日よかさなる中文は参上御
あく文をきいそすゝむる御てもかく結冊つきを紙にして
奉行の家人紙のこともはこに[illegible]えむ[illegible]を[illegible]
うて職事にもおひきて史大夫門をんといいかのもとし
こより政友の挙（キヨ）わりたる（ヨキ）[illegible]の厨とも御記史を
中中文をとりゝのつて上そのもとて御覧じて大臣
大臣覧給来儀御て見てくしてとおく結おさと
挙（キヨミ）中おさるへ北中文を奏せす問よそ覧て[illegible]

夜出さへし大臣のつかさにも使ひとも召へり御とも
名のりをして大臣の著奏する事　昨日ゆゆし
来三日去夜の儀ゆゆしかりんへおもなる事まれは
摂これを任せ将任宿官兼関勘文かく欠すらんへ
中に成らせてこれを任せ文の奉わりてに給を
れいとのし殿上にて奉納ちて奉りして執筆
にて大臣参内をはゆるして此の中に成らへ候と
返し給う文紙は大臣のを紙とりいてく菓とかく
し勝口示の氏の身躰をまかへて京官はとよめ候

らうし折紙を見せまふ勅任はちきにも御覧せまふ次へ
て一人を任せさるにもの沙汰ありは文をまゐ中よせ給ふを
こる大臣挿の示紙を蒔く単を深て大臣よ御中文を
くはかく（ふすまに かくちかり）よせ給ひてんを賜く成に筆紙
ひちをいとくかりよせ紙とらふは硯石紙挿して
ことさやしにかくて鳳の文の料紙にすて硯の蓋の方に
方に入たり墳さ納むのさかしあんさせてふみ持しとて
大臣は奥乃筆をさ月の中に日紙入（[illegible]）
大臣御覧しもんを任しまして筋御覧しくたて出へいは

さはりく御ありて後大臣は西北てんとに入て参す
いそしてゆく拾〔栽〕町〔柄〕わかちて以ちてさ及のてらし
二夜つらくに抱元たら陣くそこに起のもらして一に
又抱いて是をとく陣はに叙位あれいこれとかくて
陣座のもとし蔵人頭参せられいたに大臣殿上の為宣を
これ御かく大臣を召て殿上にあて清書のこと
はく上て陣座にあてこれとうたし勅任は黄なる紙に
かく上ての奏受は奏任の白紙にかく式部がつさとおかく〔つらよ〕
参任にかく上てゆくえまにして蔵人にさて奏聞す

参議内侍是をとりて参議下名をそてつけとこかお
まるれは上へてまうしまひをおとしておかこあふあり
十四日〔中絶〕ほにに射〔封〕令の内論義ありえて右近陣の座にかけ
陣饗はましく着陣ぞてある去け束のよこさまに〔横〕陣〔座〕く
きんもいわり涼げこれとうとい三献まて俗へきとは
あれいこれとあす出〔ラ〕居〔イ〕のまけすとて出〔座〕の末えてこれ
座に陣くるて御前座につうき御殿の御簾たれ出ずいの
御座のるに香水の机をたてて夜杖をもしてとく
二ゐれ陣へに信の座元子とを立少に昆明池〔ミシメイチ〕の障子をたてして

其のさうは元子二てて御掛香水の人然りあての役二人の在
と左門ひさしの南にお控て西向き さて御修經の座主の子を
淨道のたとへば摩尼殿の七日のおさりあちの大哉百度に延
ちーして從麗門より入てわらう御のありて主の手御へて着座
主論ても法てきての御ろわさう者てことて御掛香水のさ
かしろてあれは與福寺南面より權夜かく附まさてさひ
て都の人淨道ともて定まれし大衆かいかし四帰れし
大法師答とふ二人をも法衣の元子にまて乙て淨義
をありとめしめはら完まてふて已下ろくと散下

とてころかきた我く

法御粥
十六日御あかく法いるわくかの華あしわか紀人と
以牛上代在し
杖あててろちわ事てよあり

節會
十六日踏哥節會二獻湯て元日のとかるに祭まても
舞妓南庭と見へる延まれい内弁　御坂り
織半やいかなることかとふ舞妓殿上の小庭より
おて掖出殿にかうるる弁はかとろ掖戸案もし南庭延にし
とうく二行に揃ろくそてかり東にお大丈と云者二人常斂
しててれをころちかて桜の南さ揃まてゆる舞妓

庭をめくりて三反内教坊よりまわり舞妓に曲
給ひぬのち后宮なとよりいろ〳〵さま〳〵の禄
あり次に宣命常のことし今日ハ一献に国栖奏の
勅使二献に東三献に舞妓なと奏もあり節會
おなしく舞妓中宮に参いるに饗禄あり
廿七日射礼建礼門のまへにて上卿弁少納言四府
なとあつまりて弓射る
政始九日なりつへけれとこの比ハ日次撰てあり上卿已
下陣次第へておなしくもあり弁相扈に着くとれより
弁少納言外記史結政しりて来とおとろかす上卿右
南所へ行は大弁もちやうに結政のことはて南の
所にて勧盃ありいて侍ちそて出さる者作法あり
ことはて入内して近陣に着く
吉書の奏九日あるへけれとも此日次撰て大臣参て
奏にける国の守ミの鎰給て不動倉のかんかん
つんとの文と政始にあひならぬ文なり大臣陣座に
付きたれハ大弁申文あるよしの気色して床子
に着きてをのしちきれ弁史なと座て文をとらさせて

こゝそぬれは云経史をよみさゝえてまゐる太弁こゝに
由庭よりて申文とり申す大臣きこしめされは
太弁入りつゝ史官にこより入て宜陽殿の壇上に
へて小庭に杖をとりていさゝか傍らく大臣目して史にし
まゐりこそいさゝか通つかまて文をさゝけ大臣文をとり
て見をえて一門くらしまゐる紙ひ祢り三朝して
さしやらに史取て祢申てゆへ礼文三ひしとり申
いそしして杖より文を挿へてたり披く大臣座の弁と
然して奏さふらひぬめし給奏に弁朔来礼の事

御への奉幣なのかはのえんにてたまへは御しちきこそ
奏さふらひぬよし藤人まゐりてまゐりそれは度
奏のれは懐中せよと仰らるれは殿の懐中は母屋の北
まんなかたる所に御帳のまゐりて勧修寺の流には
此弁とらしたむくるなり外座に出させて陣にて弁
と然して弁は中将半蔀子の下にゐの文にえて
然ていそうしして陣にいてて然す大臣をきそ陣にて
左右門のまゐて史にもたせたる文をとりもちて右の
手して揃てたの手といさゝかありて青璅門よりのぼり

て年中行事障子のやうにて居て元気とゝつかふ
御日の壇さらく掃除(座)して日ろひさしを少へよくも
此座の頭は皆よりくゞり行して次第に高く盛て
皆お乳のれいさる所々にさて膝行してのぼりて丈をさて
御所々やとひよぬ乳てれ私らとせ拾居のよして杖と
まうふる事もありとみえさふ走てくふ大尾逆行(なぎかう)そて寂滅
除きつる事にて立て深ろを大福に御祈りてやうて(製)
うろね様にして岡に居に杖をもちかくる心文と御経
せらるる様さ乳に書るしならせうこ祝と御とさて

はへて御経しまそて御前をとかれいた尾杖を去り
あまやかくゝかさそて出乳て手ミ赤て御たるを拝
起て大内入りて庄の井てこれとひし乳て(結)かれ
やし御経せらるゝ作法のとこしよく申てをしくれ
乳をなしらひていそしして侍くゝ通満きそくね
続して出まて杖に取持へて去りてくこの書をしろの
つかの西をぬうかり文御経しまそて経の拵り出ふとい
お拝見あくて二乳に様にかゝる乳にゆふ始り
(初始)
御初始まりの中より乳にら満中して河原(かはら)の(穢)くへ

ところに五位殿上人使にて駿ひて佛事ハ二日（中絶）
まて五大力を本尊として経を講せさせらるゝ
法勝寺の修学生をまねく
祈年祭
二月四日にとしこひ（祈年）の祭一日より此事のはしこえ
なりと白河院の御時後冷泉毎月にてより法会の
ためもよほしはしめて二三月にて神祇官に幣
をたてまつる悉ク（たちへ）てむかふ東上あ東下二千餘座
の神をまつらるその祈にたしかにかくさへもあり例日に
との給ふ法会にも祈年穀をおこなふこそその日

南殿にて御拝ありて寺門のうちにまかりて座につく
とくに遠ニ段に付き弁の[illegible]をとりておなし様なるを
みつくそて額の東一方のかたしとあくたる兼家屏風席
のうへにすへ叙位の筋ならし常のことし修撰
春日祭
太神をまつり　法
上の日は（使上之法式中絶）の日春日祭の使たつとまの中より
つとむ昔は歳の始りのまつりといへるん（書紀）の
ためにて祭らるゝ所の女人ありて渡されて舞
人ほとにつゝしむのまつりのこと　使を名門のまへにまゐくく

の中より舞人ものゝ祿たまはる舞人出て祿のかづき
臨時中の日暁内侍所に舞人出車ぬいてまうけ殿上
ことさらにしめ上卿弁もまゐらるゝなり
（園并韓神祭）
巳の日は園かみのまつり上卿弁内侍まいる
（大原野祭）
卯の日大原野のまつりを氏の将監使つとむ春日
祭のごとし上卿弁内侍まいる
（釋奠）
上の丁の日大学寮にて尺奠あり孔子をまつるなり九哲
九郎をもそへらる七第論義あり上卿のかもまいりて
かまいりて宴の座に侍文章博士題をいだせば
くる日大学寮のものまいりて儒人一人もちてわたされ
ぬのおもてむき儒人文一人御前の水のほとりのそのこ
まくわともいかみそのものゝ丸をくだし儒人にとらせて見参の
つかされたくまつれる時の釋奠のそなへものとりおきぬかつく
いひくだくさまをとりちらし寮中へいつるなり
（祈年）
祈年穀奉幣この月にえらびてたてまつらるる廿二社と
上達部のさるべき使とさゝし（第日わかれね　第い当日なり）奉行蔵人
ゆゑて催さるゝの八幡中納言参議弁中将の乞春日
宰相其の外四位五位の使なりいふまでは使は次官あり

外記より御定文(サダメブミ)を進めしに上之て奏聞して返し下す大
内記宣命の案を上卿に付く奏聞以後して返給
ふ二社の宣命下給ひてもとの座に入く参議以下
こおりうへ参議ハ弁まいりて外記おさき御縄(?)つとむ
以後して返給弁我友の御奏聞して使の座にける
し奏して上卿弁我宮にまいりて使のわうち給
給ふ是れ幣御幣為(ハイケン)との給に南殿にて渡さる
幣料ハ御(?)て弁使同よりしわつられも取渡
其也元二社ハ伊勢石清水賀茂下上松尾平野稲荷の

春日大原野大神石上(いそのかみ)大和廣瀬龍田住吉
日吉梅宮吉田廣田祇園(きおん)北野丹生
貴布禰(きふね)
三月三日御燈とは北辰にたてまつらるる霊(りやうかん)殿にて
へまつらるる一條院より御にみえてなり一日より宵(?)
まてまうらるやいかやの中にあまたの穢気(エキ)ある
よしとかといふは御れる事にぬるまうていくんて
とよしさて三日は焼をたてまつる也のは穢あること
様ひとしの理のあり小也てさらに延(?)へて
止をかし 扨も(?)

かくの間より南のうしろのつなとかへて出けるなりされハ
いれいの祝物てハいろ五位蔵人やくそうをいさむ
人形ともさんまいとも心てよりあひ入るなりしつも
こよひさ雨にふてゆきしへたてまつるにいえつりて来
たれる扇子ても又御前千もこれと明けてはいきを
まく浩膳とも入せあうしこれ麻もち返しくまき女に
まさ庭上の台座にて秡の御紫中やく太の手して
とりつなをいひなとて人形といささりあくさんまいと
まさちて返しまき出りをきてはゆる也ころ清以四方拝

まいるへし小朝拝の後やくはいて出にして拝殿拝をおる廷ある
院拝拝なる陣もあれ九いか事し雑拝れりあしの中古居
の比より浩かりく宗浩関白よ院わたせらる由へ横あれハ
ねなひかりへしさるらしこその理わるかりて四方
るし後朱雀院の御代よみさ行されたる御代にはなあり
杉れなひあかいそらしふすゆるまたうしいわる人はその代
よハ常よるへしゆえかくなとちさる
三月中の午日いうし水の臨時祭にて国忌にあたてらい
下の巳の日よあり二月廿日中宮行の藤人使まいるとあ

さてむかし鈴鹿のすのこにまゐりて宣文をとりて伝文を奏
し返給ふ使蔵人今十人をおく代の始には六位の雑役
蔵人四位より下こそまつりこと四位蔵人五位六位こ
蔵人頭典侍掌侍などにあたり蔵人今まりとその雑役つとめ
まりそら国立てまゐり川へいたりいてまうし宣文二通出
て奏は下りて返給ふ日記を携へて御かうわうまいる
人のかまいりこれなこれは二三人づゝ大殿の方の殿上人
にあくをそうらく蔵人所にまゐりそよかへりつゝ手わりいさてら
蔵人頭の様をかゝして殿上に出仕する所蔵人大臣

もろくしらこいてあくよゆくさんをいふ殊に家々おもり
あるゆゑんなるまししかはかるかとしてゆらんすてすり
足をそらむ大府友人ありとれたなにかはたたの大将
あるみりまでもかるべ不足なるはかりなてのかくさそ
関白大臣大将後見なと屋あるをまかそれなり御覧して
三日さいろうしをへし
凡
五十日は朝より式楽の中わりありいささくなく
と代あるてをとこおもれ所よりふこいさうしまいれ
立てへらかゆかしうらもてよく頭ろよりゆきくれいしよ

行幸せ給ひてむかしよりつくすのこなかりしおとなさふる
かの四位五位の殿上人かんへのもとより地下の諸大夫并行
事潔(?)子のもとよりのかりて中納言なとうちひて
皆なみゐて前庭を分かりて溝の内にて隼人と
百隼人ならぬある非常のですてまつる行の壺にもそふて
行なれとくさしきさす紫宸殿の廊の下よりまて
みくれなる行しかりぬる二行なりもしいむ御下りし中また落従ひ来る官人
もしめてさひとく前ひらつきあらせたり隼人まいり
てたりとそくかくねふてさるまいれる隼人のの

うしなそれなくたたれ九へしらくひて変たてまして
はいりいし門のへせ給へいみて参行をそのひよななつ花を
さいさん不へ申へ供ともの紫宸殿のまゝん相の右
かゝゑむまとしのつかうしてはいりたり隼人舞の装
束とうちて紫宸殿隼人とのもうくりあなてまつりて
なまさる使なれ衣とそ席ふ下さゝへのそろ御かり
らうくられなさふ紫宸殿の前まんるれて御前あてろくてらんかくれ
乃まれ庭と南むれよし御坐しろ中将このひのとしこの方より南て
しろのつかへしめりは庭のつき南の方のとおりまうの

あまたゝびて立文にさねなりあさゞかくつゝきくほうさ
くしよさしぬるに御幣ちかけさあまりにも関をはかまゑを
うらんさそはらしそうまで一丈ばかりにきて使の前庭に
着ぬりかゝちし給ふは別に関白まゐりてひくの前に
御簾を下ろし御座に候せ給ふ関白殿下ゝまつ（　）の左り
うくこによせて殿上に上りて座候御前あらぬ大将まゐる
れ幣の御様のことし使庭に候くはわかちもりてして御
一る三足御幣のさ及に納まり一丈三のきいほる給ひく
舞人をそきれハついたてしもくさくるやうそ別に候使

葉の下にまゐりてひさ御つゝみて茵給さて御幣給
こるに外あり両段再拝はあいてゝ次の乃し人奉
とうらひてもの祇かゝはころ侍従その座に於く
たるもすし　れ始てりそはころゝそのてゝあんかゝ御
ひそて使にへいとこさくゝ入りいる入れいて始めてし
けつ御をさしそく給わしたひまて文の御袍様の宗たる
あり御らんひいものこしものもんまて座さもふ　三敘案
のもんまし之ん下のたさ竹のすいにあまて使舞人　移了案
の座南上西面まし八ついたての庭縁席あり人長その

西よ南むきに給りおかうしの南よ又へのかたへさしよせて
宣命を奏する殿上よりて内弁より出しておのおの付なく猶階
よはしく中将して返給もしかれ御の後おくは障子よて蔵人さ
よ奏す蔵人二人殿上のはしはかしおふて額ひたりのよこの
みなかうんみよりのあらひ八寸許そくて明かん奢内侍する
ぬのかりくさんといひしきちんきを一重南二のまより出
させ給ひ障子よはさせ給関白殿御裾とりゆ
給ひのこうし障子の南よ御座りをたてこをくかをゑ
いさうれは内へぬるみかよし蔵人の頭中将北障子

の下よるむ天気をうけて出てまかりとの
殿上てけりてりて縁先門より入ぬかかの下は座よ付く
宜ありしるよ二ずよ付きたりあそれはく座をひして
く内弁ふて座よりたちかあり殿文をとて年中行事め
下よゆく天気をうひて御へのもとよくてりて二年よ
付きるゆる上に進みれわそひをとくむかを帳の座も
使よ下をうして仁寿殿の北廊下をへて廊の二の間
よりおくらしをつく縁先門よりいり内使兼令下
来て座のはしく饗は付いさな二はく○をく宣へなり一

献
こんくわうにへいし下れ共宗陪従の座五位の者人へいし
出納巡流(シユンリウ)はじめはしらし二献弁(大臣が)一の上達部揖して座を
たちて纔見つとめて南廊にて盃をとりてすゝみ
入て使の座のうしろに弁る揖して内ぬきて座に居
て又揖む五位瓶子をとる酒とりきて使につぐ使一
の舞のはきそくしてこれをとりくわんぱいの人前
とおきて揖してくいにみてぬちて又揖して
垣下の座なはち揖語のことしきんはいさかつき致く
あり盃もちて揖をねし致あり五元てんさん(轉盃)あり又

きれい垣下の座と二段とて五位殿上人垣下の座い
きさかづきをとふ二ありけり献は陪従ものゝ勧盃にこれ
座きの人勧盃すその作法おおくてんさんあれい使垣下
の座の人にてとりて上てらす第一の舞を出して纔を
後次第におかはに献わたりい二献勧盃の人垣下に
三献もしい五献とありてはさかづきのとあり
あるつ殿上人二人使弁に五の舞乃ちへり
弁るこれよりさ見不の後にお納え人さと陪五の
舞陪従の前におきてけ役の人うけぬかすきにて

かくり一はくのうてまくら稚子さ乃のあたりのかたはらと
おしわりてまろく法経の糸のまへハ法経の菩薩人かり
此役の山経なし（双操）のもとよりてもちしめつまよ
おるさしてぬかるとそりおもうして一河上上蓮坊ハこ
坂下の大尾之まゐりて菊さし女の花ば
とりて彼のかしふりきさて花をもそりてまりをを
下さるゝ〇にまりうてね様をまゐるまゐ菩薩人のまさし
様なり御身よ上蓮坊これをうめ人の菩薩なおよ
おそりめれとたまもそりてまりをきさしハ中子の

まへおきをのちのひまる和とみてさ侶せききおかされハ
ららし侶はつらしきらしむおくきとのさ侶り
さまてそひかてるんやり上蓮坊さしとりきて
おねかれそ彼菩薩人まそを倒へ入せ侶はさらひやそ
出させ侶へきた侶もハ菩薩かしおりらいせ侶と
ゆうとやニうんまそて（螺蓋　鋼蓋）侶をいうしさんとそ地さしのさい
菩薩人もちて来てむ侶の東よなくとのせい侶も倶ていハ
かしかに侶の侶わらぬ先侶をいひて又出させ侶ふ
られりさまに菩薩人多在して菩薩ハ流の傳志かくの示よ

みなり以二人あれはつまかしくわれは舜人をもとむ
舜帝のとし彼岸の東にかくれ隠遁してもなかい
て寺門氷子まかりて井をて大ひるをみゝして名
よりそく入御の後ふてたちくかれは法まても御使あり
舜人下藤をもちまそてすまてにてる彼はおゆ山島
いかせなり百人もの姓とまうし
次日思ありぬら南まにありは御あまかきは指まかりく
動盡ろくかくたまふ
四月はいなら御衣之くおれきて東て御ちかへりそくおなむ

御殿の姓にかくまかりてすこしわこふんてく
給とてくるしうてか大門をよるのあくもおすう
いつろの法などおれしもおれとあくしきかくきこ
おすたよ姓からにはそてはおな御しゆそ
さしのあやにはひとへのかりを内藤寮なて
其はら女房さまかせのさねても衣之のひとへ
明てさねすしと上臈法様のさし角とて
平座
おそれねとしいとて上道子陳をゆうしきこし
依例
もして出てすかすおとおりてとこあくへと給て

上て宜陽殿にさしつけれは装束せさせてしはし待く
三献あり舞少納言来のこん上まゐらせてあり給ひ
代少納言へぬるもおすしろをはく四献のこひ草きり
て館御巡とんすんとのけ志む見参禄ひかして参りつ禄
のこしかうくるまやうしあれは上達部南庭より
あり庭南庭の東の一万のとゆりて上りて庭拝
少納言見参さんさん給はりくさへ門庭にまゐりて
めしとるつかるかんたちあいまるむこるまゐりてのか
まくれ拝しての門

平野祭
上申日ひらのゝまつり上へて弁内侍むかふ東宮よりむ
ひて見参をとりて内にまゐりて奏す次ぞ附宮使あり
五位の殿上人使とつとむ東宮の舞人まゐらす御禊
あり御幣おくりものまんしの宮のことしとさうれ

梅宮祭
ひさしの御庭をはしくに出でたるより出御
同日むめの宮のまつり御幣のことし
四日ひらの殿の庭内のまゐりもいたす使御へ并明日
中絶
空門 大いまと同かその宮上にこれあり 同もの非といのる
擬階
七日きさいの奏上てそゝけまた二月の列見のひさる

おりそられものふるなり
中絶
卯日大神の祭に巳日使には大宗姫のをし使
には日は神事に来て中宮のり御禊つ給のをし
はる御所には日使には其の由へをには夜は卯
日の暁そ夕ま待るか由へなりとらふ
八日灌仏（クハンフツ）あり神事にあるるよしは灌仏あるは
翌日は九日より御神事にはふは女房の布施とも下りて
まやさゝるゝよ給はるものも見えずく風流（流）なく
わるなりちりには物をいかく風流なくいとみには殿の

女房はさんさんわくひの御座とて御てそのほどよ
山かたになしてそよりの仏のさまれ給はらを作給へ
まく殿をおせりとくに作也ありいの方よ
札をとてたらぬよ五色の水を又かへて東の方よりて
殿上にまゐて御女房のなかを衣をもの水を金
盤に入りさせは藏人よりて殿上のひとの上に
とくぬきんもちあげていよしわる花の枝を
折てふところにいれてもわんへむかり上達部は布施
のふなつゝ御殿て御殿のかなをしいとなかたゝ東の札に

さ紙にて御手にて庇につく御料の山荘ハかミ紙にきり
まいる殿上人の布施ハ蔵人是をとく女房の布施ハ紙を
蔵人とるなり御導師の僧のかへりて後宮のきはとりて
仏の水をくみわたせて一夕入くさつ御導師をんれにも
ムて次第にもちゐて物のつかより入て前さて勝ひし
ていさことよく水くミて灌仏しく聊志り
こさて礼紙もて前にかえしてらつ出入のまへこのさかし
おりしうこれとの文の其ともあくいかくいそう
うへりぬり導師ちを人ほとりて志りそく

院文ことの例あり
中酉日かもの祭なりいつしの日上卿陣座にて行く
右府をおしてけいこのよし仰を内の日にゆかれて
使をも出立らるけひいしをもやりきしめし一條の大
路をはらはこもちゐて七日渡るさせぬり流して
世給を内ハ一条の大路れさらしきかてさらし
志るかし之例をいわくる福も宿人をも撰よりは
り立ようて来てれい大路のまに小津りとて
て御使ありかへしの使来て宣命なとより内記

内侍にまうすなるをとらへ参りて内侍のまうしそ
かうい いり 御給とのくちさ済まての出けさし侍宣人命下
なまいとも来使 物 中か来て宣命にたまはれ御前よ
り出るよし蔵人給はされるさ紀に御殿の廂の簾
うまれてかへしの中御とりてうしよ宣旨遍しき
まり後紀殿つより座につく立後りはすへて節会
ありと来る人もの給へるしおもして舞人きしきい
ろまとの衣を 右のう きぬ うよいかん下りおまふうよいかん下よ
内侍申こし合給蔵人給装つかり来てつきりく

使は後涼殿よりおりて南にたちて紫宸殿の西よりおか 舞踏
て御衣を随身にて随身のもとへて左近をうくる
はやりなくあをいかさりける 錦 御随身まろ紀の戸より
入て御前にいらて舞りて 舞 依 舎人 居飼 給りぬらひて々けいれ
ちんにて御随人ありとあるの殿上人と来のさけなく
さのあるをくにまいらして門の前にまいりて婦来るよし
るらせいまたをひて給りぬらみてかへりし
また井のこし
中宮春宮よりへの御使れにて御殿にはいまして 御禅 まいる

しきのちんより典薬いりて小のちんへ車寄
にあして左門蔵人上かし出やう薬をとりて
ひろくるにかく女房いてこれをうけとり（きぬをちきさて）典薬
わたしはらまの車出車五あこのうち左まわり典薬（糸宇）
たてあて出車にのるよしいまいさうれあたりいき
むく命婦蔵人おりしきへあくに蓮之薬をまいらせ命婦
命婦くら人の薬を出納うけ
（吉田家）五日より内の宗大夫まいらし
五月三日六府菖蒲のこし南殿のきさしにたてをく（階）

（主殿寮）左門守あさられぬにも庭にいこれを主門にてあんおく
ついたてにふ婦かくすりのつくさせ左右婦あひすし（典薬寮）
此くのりく殿上のまへにをさく五日いらぬくもておとこ御（糸）
節会の時にもまいはく五日節会くえし（節）
ちの月にこれ楽諸あこあそうさきて日蔭とさうくむる（宮内）
屋のゆきんさうくわきまて御帳のうら西ろ御こさて
御座にあり伝まて本そうかのまわり四ケ大
寺（東大 興福 延暦 園城）経の中よりいこのきこしわうう行て撰
さうむ（ミヰデラ）義の庭あり薬師の庭二三間東

ゐよえて　ちやうたいのさく南のひさしにおりきさう
石をいのこんのはかのゆさ給ふにかはちやうしもれ
ことふ所いさしこれなつく上達部殿上にて半の出
ゆてゝ禄給ひてありてゐのまけ地下いまて瑛門より
のかる堂童子のことに所小南にさふらひ　堂童子
いか給てそのんとゝさるぬかまんの人とゝきて殿
上の程ねとに上達部はすの在に着給のかる
さんまいきんもかとありてかんしさくし所のかりて
論義ありせしきてとりて禄給かわされは半

そてから香あり常のことし給かんそちやうか
たそく又所胡所のことし中宮あちしまた八二ゐ
とうへの所南にさ門らいしくきる漆子そりのさまて
道場にむかひてをしいてしありありりの御本丁を
いて所ちやうしとん衣いは秋のかたくなり
今日のあらていことをまへ給ひたし給香給あり
六月十日忌火の所せんまいる時のまいさんはちに上格
子よりは志まおとりのかたよりわたしてまつてま四程かうけ
まへて給をいまくへおをさし　ほをにまてへおりし

納こん下口使にてすゑのたいにて御めんなるなりみなまいり
なされいそのゝち御参内しはらくおほせられさふらふ
よりさ三日めしていらせられそのゝち上かへし
御贈物
武家より八日御かわりもちまいるわうちこまいりくさい日ち
主葬人みちのく門跡よりくまいる曲録わさられぬ
まくまいられてのちさけとゆめしてゝまいりたる
織よおかとあけて御いきおいさしれぬのこいちい
され四足ゆえへてまいりそれ御のいうちくまいるあり
あるのはれおとさいえん寺ゑむむさふより御膳あり

一秋さけまいる七月つこもりまておりくおまいる
月次舛今食行事為中絶
六月十一日御神事一日よりらし候る行事ありいかの
ましやうに出御はくのれは供奉をそてまいる内侍家
てらに夜いすしみは祢かられたりさ紀之大忍忠
御湯をめすこゝ後にあはたる上へて陣につきく無きりて
祢宜はりの嫌をあふ小忌の袍をたてもくの火をきちて
火ももしおくたむ上へてやおまゐ加納天御紀史に雄にあ
いくる人小忌をとこまるに来り蔵人へうふきて関白忌童て
さる南殿に出御内侍御のことし夜御おつしゆ燈ふく其後苑

あり次のそうしふみとけ御くにいたし南階よりまかず
上首のまうけ叙爵は役つとむれは重いよめさるるさいひち
そしれ気は湯明門わよ御出て中和院よいる大忌
のみてあくよつけて御要るを世話わくそそこれくっ
御こなふおのし右え門もて御要紫宸殿の南の極
まうすきけかそとれ弥半下は紫宸殿のひさし
より入て世話大庭子は御座よつかせ給ひせしちんも
アそて白来れ太庭子も門は庭につるまし四角に白
木めうしろと白木の机よあて関白の庭とふらく

下にさ丘のくえりのまそり叙爵太庭まるへそとくよ
もんをして御湯まいりそて御母よるあり宰相よるあそり
そそくちひは日より七ぎひまでたれ山法の中納言を参議が
る諸人は湯のことわつし御作みありその人あるれは
和さとれよも来あり又えそり給もしいめ法諸人
の中これも山るの来れ紫宸殿よ御いるらくへのさみ
ねきさくよ明衣をさそりかくさ〇おすし御気
されば紫宸殿の方よむかひて七度これと拝まさせ
御母よれ也くひらかしている世話てひきこめらく

あまのは衣（天羽衣）留らひ、舟のうちにかきおきて又よまさ
くされうのはもとめしてありせ給ふ度常の
御装束などめして内蔵寮のまてまゐらするをぬぎ給ひ
つけさせ給ふ文ぬひ殿まゐらせてまゐらする
さいかく（釆眠）まいらせてまつる、これ又も内蔵寮のまては
御まうけはしく（積）と御やうふかたちの袖よむさふらふ
これありて御衣いかよりまゐりて御はかまゐる御やうふかたちまいり
其文は常のもんの出てかうちて御さま所わかつ
大いのはし（欣）（出）の流はよく（経）（賓）さ様の御綱もの出ちれなん

いつも御装束口紙あらくかされけるは暗のうち
ら様へ所をよ申（青一）内侍つゝあつて御殿にまゐりて
寝具（シンリ）を使てられよりさされ侍るそれつゝきの御殿の本宮
御とひく闈門闈司ふく上て下御殿のまへ
御かいり此侍を申ねとゆく一人をみてことを
花よ前と申く南殿（ナンデン）のあれとまりとかく
く（寺）（掃）かうかうしのよこ所の枕（坂手坂居）風へ（八）（え）（気）そくこまし
上て采女弁か御内をにも此史えていとられを使
をゆへより入ぬれからもんのうちにさて御殿へさて

南枕にたてゝ見え一丈二尺あるたゝミそのうへに六尺入れ
たゝミ四帖枕のかたに二帖しきわりそのうへに九尺の
畳七帖その上に八重たゝミ表九尺の中に一帖をしきて
東よりいてゝうへしきのたゝミをしき枕には金
多ミ九中に枕をたてゝ御帳のかたはら御ふすまたゝミの
うへにおきて御しとね（褥）御扇をそへてくゝり御ふたおほひ
御帳をこえて御殿に入御ありて御殿の末に坐せさせ
よ帖をかさね御座たゝミの前にしきゝてつゐせき拝あり
はいしてその御なかに文けん（班）て帖（帖）をかさねてそのうへに御着座
ありてと

とゝのへておいせんのかたへ（神食薦）このとこもちもちてまいらく
こん帖の上にまいて ゑんとり（塩）（酒）のからかへ御とこもと（食薦）かいまいる
をいせんとりくまいて ひら手（平手）いこのをこなんとんおきて（ち）
御かしわ（干）くもの そこへも次第にまいりぬれはから御へ
ひしてとゐきてまいてそのゝ次第に入させ給ふとき御
このゝわりことりにまいらせ御出の礼 神今食は五
出させおはしましてそくおわれゆへところしき御
次第によゐこふかり御白（白酒）きかた（黒酒）くろきよまいりて
もと（本）かし（柏）をきこ捧くおもあいのはんさまいり

ぬるとて文字九しらる経へ文にて壇をてひとつらる
ちしかれ門仍は氷雨いふなをらすれ玄の牢なり
またはち文仍は氷さ経のとし経秘半とも八卦なるは
さよそ化気のくらゆりいふせ経世一は曉の仍せん王い
諸さ経のとしにかきそくる経へ象くよる諸つふ
の神ぬおものともし中へ形くまつりぬとく上世いよしく
経ありて以由ところを経そくの此壮象牛文をよ名まふ
神様変おくおこなそてとりいまつ支の麁いかく
はくの此壮象来まりて非様支へ行車あるこ神膳の

かといふ泉府の極よそかくしわり教ぬの此せんの経
とる也くし神まくらし妙教もそうしくといて還御
の後しの於なよることいて他半も変さてはし歳と
いふ月在つの内よてそはりさふつ妙
次のおし又きさいの此乞まいるいの此花の太陽子まて
墨盤一さやくかなてて他をけ由ともらけよもら
方の由来のものへくろりこくちかしてゆるし御所
有さいの此よあいはよおの乃れなきこ御さん伝守て
太陽子と小よ上世く南山なよくす太陽子の生へよ

東の方はひさしへてをくそれ南に二階の上に
かさき二けんかと入ひさしさへなりけれのこかう
南のおちしきこうしとくその南におしさたて
はなのこひさしをいせんは人こひさくうさく壇
けたのこひまいる渡らうすけやよと見えて
御園云
たつみに向てこおしおもをせさせ給ふ
祇園云
十四日祇園の禁中ことかる事なりちらちしもよれ
しつうをさられたは沈んはすし
日次祭
十五日次祭は日次とはいわり祭世に出す内宴也ぬ

御おものやくまたつこつむしの世を奉りて御禊あ
庭御殿より東庭にむけはせさくよりわたくらい
御贖物 節折
下に至をしかそくは佐とらる
はとまりの秋はわらの末いる荒世和世のはしめ
そく二るに扇風にて御在をしくはきへの
御在のとし昆明池の障子の南へ扇風
殊方もし出だたる蛇基の寸出御の在ぶ
北門南の方への遠くしのまへの庭にそれもん
走しれ勝まんとひきそてこなされ移しく渡るゑ根

ふせいのたちあり節折(ヨヲリ)の命婦(ミヤウフ)行など称して
はらへけよりもしやくあての寸法をはかりてたてまつり
ありあそばされのちにかへりてまたかけ給ふ
（中絶）七月四日ひろせ龍田の祭四月におなじ
（中絶）七日夕人ゝにてしゝかしこまりふ称に入て乞巧奠あり
（乞巧奠）庭に机四をたてゝ燈台九本をたてゝともし火あり
机にはかゞみのゐを入あり[illegible]のゝ琴(コトシ)をたてゝこれをそなへ
はく瓜のたくよりも[illegible]などを汚湯(湯)寮にとき
琴そしならべて二のこれありつゝいとんさき(鑒)洞[illegible]呂

半蔀あさのたゝくかゝんまくあり
（中絶）祈年穀奉幣はつねてとえ如二月におなじ
（北野祭）八月四日北野の祭あり祇園におなじ
（釈奠）上丁日釈奠二月におなじ次の日宴（中絶）の見参
参りて上卿使庁にまゐりて参る学生ゞに禄(禄)給ふ
（中絶）内論議あちらへらゝにもしたり
（石清水放生会）十五日はやしき水放生会といふ内(内裏)まづ宰相上卿
宮主舞楽府などより宣命使からその使をたて給ふ
（駒牽）十六日ちかの駒ひき甲斐（信濃）穂坂（不）から下あまた

あれこそもちゐらるゝハたえてかハりのはしめりこの
ころ一両年とこしハそれたゞ望月ハかり
いとめでたく経て上りて後の庭にて着く舞
文を奏し後桐舟如納言を来つゝさとのく
建礼門のおもて庭子より比ぐはらるを来り
舞台経宮殿おもしろきとりゆかり撰ハおの
庭子あはせてあかゝらゐけるにあふのさて内裏まで
一列に庭子はてさそりわるを始め流失文部より
こゝけの便なくを来り伊勢よりしてまいら禄ありけり

御灯
く此頃人多くありてはるゝをそんしくさる
九月三日此従二月より有りし
三席平庭
九月平庭四月より有りし半陽宮寺ハうちとてまへ
きれいみき経へおもしるく下より奏せるを平
庭ありこもやしらおへられハ禄を経ふつゑや

御幣行幸之儀中絶
十一日御幣行幸あり出御の儀つゝのことし内侍叙
璽を捧て前後にさふらふ始を来の云けとしハ前人
おちすは要慈苑をとり丼はるを同前すゝめ此奏兆
一 神祇官に行幸ありてかのひさしにて要理より

すゝりの内にかいし二人出と来のさけ叙慮て
まゝ幣のこしに御幣りて出来の庭にいてゝせ
給ふ御幣をもよをしてまてふ布のはいくて清うへは
たちつくりてとは来はしてれつの同かれ幣の畳
て出来かもとく膳にゐり次間よれ禊の御座に帰らく
幣のこしすへつ出給とのくゝあり上て廊の座着て
宣命を参て帛の御服をもとくとまりて御禊乃
御座につきを給ひしすゝして大麻をわり次に祓り
とます二ー了忽か納言を来らく続まはく中臣忌部并ヒせと給

らるか納言ひさ成給おきて給ととまくなくゞ稱唯して
揖してい門中清いせへ来らくつへんかけすくさえか幸御す
いふへ来らく御又は御幣をとりてらくへふて後内不成
御幣をとんへ田しそしてわりくなくさて揖く続な門
はく次中たとえて中た来て御幣給さんとり
つゝ来の下かひさ成川く〳〵下て来て出居れ給らる
中たる揖唯しして門御使の王は帰る下てかく幣の
御へいのこし非違使と出て二来の大にかよ
いくる程にを夜を庭をせ給といひちれのゝ変して中ゆち

こまて還御ははのごとし

中絶
同かんてんの参若宮参詣あり菅勘文卿にて
御絵どもら大臣に目ろく注進らく結おこなふ
平座
十月一日御衣くばりて旬四月にあり
蔵人所
まのこハくるしより出るわざら丹きくまいらす
忌火御膳供贄
十一月一日忌火の御膳なわる也六月のごとし
春日祭上卿下
春日祭上卿下向社の事有り二月四月に移し
法会
此くらの日ちんこんの祭御衣を拝く御中にて
あり日かり

中絶
春宮いろはの日あり
巳日丑節の舞姫まいる四人の内一人まいりの
次式ありてわいうちくまいるらかまてのわりて
帳台ゑ出御あり殿上人ゑもやがて姫きよし
れ御あしれ指貫ちく出給ちさる帳台れ不出
かく乱舞あり見んさて引かかくらふ
寅日殿上れ淵酔あり朗詠と乱舞ところにて
こんきて乱舞あり淵酔に参給きて女房の
戸よりのかりくろへてく出色との又にさい御より下

まゐりて小のらんをかくりて五節ふなむちふことを娘
ふとまふくまいこんあわり后宮女院なとえん
まいあれと式ふわるその稚ともまふ御前のところこれ
清涼殿のひさしに帳台ありてみとそさるる
卯日わらはも御覧清涼殿にて御覧あそは
くい庭上にあす

新嘗会

又夜新嘗の祭あり昨今食にあらしひらての
前十二ありその御らん也

童御覧の事もいつれも此前おくるその心よりわきへひき
入く御覧せられけるとそ

節会中絶

辰日とよのあかりの節会あり新嘗祭にまつり
なる上て舞姫もと小忌のきみよみへは清涼殿のをとこ給
然常のくよきころ給ふいいけらみくかとをんをと
もちゐる上にて舞姫の舞のうとそ給はひも南殿の
扇子元子に給はりしくく庭にて御さきにとうあり
大哥本か常大かとまりてまいのの安名雅
とへしてとへりいるけとよこそへたるかんそちらか
さち本にそへらひくさいらおくらたる節会の

つものこらしきちくのわくらる基のらん姫あり

せちくの庭にて御花わたりて、これ堪さる人と
かは様の御かたへ百くは半わりふ人のつさには
まゐる御まゐりしとふとちく六月十六日にそこの
半わりしまふけさい（解秋）のはゝ氷六月のとし露
壹の乱舞よりひんさこれらう殿上人五輩とわり
大さゝめ家のとも心しまされは申しくらしうれ
忌火御膳
つちよそのへし
十二月一日（御贖物　忌火）つゐひのはせん御わゐ物さのの月より
おわれし

中絶
十日御神のはらへ六月におなし上て涼の庭にて
はしく参れは御下御前にて御年六月まて
此年御ゆるしあふ其ゆかの神のふこまは内の
正月つきよしおくのさるこ
神今食
中絶
十一日神今食六月におなし
此ものゝまんし此まおもの月なの前おかくまれとは
忌月なるゆゑまたはのとりなにゝる石清水
此はのとし御さいの庭しのま中まゐらこ
こなたみ二間より出御わりしろの方より御庭り

は左扁てよりおこるなり此へ井いは此のごとく統なり
字内底の左おとは●のごとし其此の後いふて
使殊人ゆりまかりくなりたるの法ありて後は此よはは隷
字なか字内に列重衣にはさらいとも守くのまより 額 間
あらせ扁ちしのまかは縦りの底南北へ行に左おは
しきて使殊人にくらしろわか末非字の不作
人へいえひと来の百人出帯ありて立せしあれを
その字かうしに作せへの下に於て下は出て使は下は
やをて部重ありて非字ありて底中より此しやて鈎金

左筋まては●のごとし底中にもろ字あらへあれを
人ちは御しあり此非字まてて縁あり
中文の如せ扁へいら底の此つか●のきえして
いろのまゆその秋やうてあらへあれたとし底
あれいは次のあしぬるに御まふ
内縁不帯非字
肉縁不の此非字行事ありて曲縁字縁ありいらをけ
刀 自親
左意ニ人に来丁はてきてて肉縁不に筆おりぬれを
此扁てしのとかく中はおら不作人は南殿のふしの字
勝
みて扌の縁あるへ寺内縁不のあるものまん全て出ん紙

引て官人座定まりて楽屋の座に二行にそへしけ
なりと楽の召人ゝ上ろにわり人を楽ゝによこ庭上次第に
庭に陣ゝ人を下て見えていさはさえ合せやりたらし
おくいましうそて次第に手笛ひちりき琴もしたる
の前し和琴と次第にいさはさふ階を居て座に陣人
出来てかれたるひて笛和琴と拍子もくふさうふ
らふすゑの日やうしひちりきを楽ゝに陣く和琴とは絃
ねよしよ琴の上に着そすうねは拍へうやよりあひ
座定もとまゑしてく人合ふり合りも楽てくわら

歌の拍子あはせて堂人出来りて和琴をのうち
きんをいわりかく歌いてく文すえてさいのおのこ
ひきおのく庭の末よりすゝみてひさ脇膝まてつき
陣くちし挽より和琴をや前おくりてね入して
あはせ歌和笛ひちりき拍子よりて早きに首をて
朝倉その録はのこし緑と陣ゝ肱付の
御神楽は秋の霜におとろへ猶なは若いろぞ和琴
は猶そさくまれたるふ春の花ぞこの三作和琴は
不作也とわる時もあり御不作のあり候か傳らる

附出廉とこゝろさるれハ前なれハやかて御とりまて
侍らるゝもたゝりあり此時より御おしとてなれと
御殿よくらん（還）御あり
中絶
前宮のちもしなく（涼月）御縁これも春なれは宮ハ秋のちも
くるそいふかるをもとより桃花の作法春の
ちもくよおもし三首は奏なとそかくりちまて
あかる二歌とこなとる一歌もつよひの串なり
中絶
御紙名九日より三日なれといまた大やし一歌と
此桃の中よ和歌をもて（カク）南のかへれまする　文二

南くそくりひさしよ地こく（獄）へんの屏風をたつ門
との世ゝ大宋の屏風あり地こくへんかの出居の
兵きさいせし（勝）（縁）御はらし出居のかなに大ひ川よ
ありれさ寸女（嬬）それをちむかてひさしり
着御後歌後歌おのし御導師かそかし
沖てく人これをつもし此所南錦の串なり衣
（箱）そとのつくよりくかぞ入くまのこ此の方よ内侍
の廉中よいひて又をとるをもしてこ此藏人御導
師のとふかたくるこよそく名（メイ）（ニウ）得あり不忌派

口まてころかなのるはさしちりそくゆくまていのさ
けやしとらてまやせいそくまいてすくろかなり
いつより此年ゆかへかしのちんといかく年まさ
てあかしきられなるかしかしや
大将のとかわれ名の中の秋かとある年し也と
をよて也一の御と右大将殿に給ひとなか仏名
此導師に昔は秋をすゝし唱られは其上の所
代かとは秋のおとしかく和哥にけられわらせらる々
年かとも成りけるかや

中絶

荷前は后のくはかく定られておめく
比後よりて出ら使は定て洪度そいなり荷前の
使の定め比かてよえ日の撥彼境の定めり納め
いこのちをとかるれぬ年かれこなも数はりめり

追儺
ふゆこと
追儺は大とねりまし鬼とつとむ陰陽寮のさもん
をもちて南殿のつんよ比れてよむ上てら下これ
をよ殿上人とも比殿北方ち立て桃のちみて
いる弦れ門より入て东庭をへて瀧の戸た比門と扱

あとみえもし火をあつくても又東庭あさられい
さいえん不のまへこぬりまゐらせしまいとはまゐらせく
さしつくしまいらせよぬりのさま文六月ふ[illegible]し

右
此年中行事者　後醍醐院勅製作也但年中行事指
以御自筆所附了立別　彼宸筆正本鳥子料紙小巻物　無銘只
被号御秘抄　然而暫所加外題也予元
来所持本為校合申出大覚寺殿御本忘文
重加清書

應永十三年季夏上旬

判

此秘抄以大閤本書写之取進
禁裏也近代中絶公事等
大概注付之畢
寛正第五暦無射中旬候

御判

此一冊如右奥書烏子料紙小巻物
南朝後村上御自筆奥書不慮日野中納言廣光
北畠一品入道筆三巻〻
取持之間以件本取合校合也相違之
所〻悉被注付畢彌可為秘本者也
于時文明十三年九月上旬候　御判

本云
這年中行事申出　禁裏御
本依所望新写染禿筆不可及
外見如御奥書故亜相正本御取
持者也然者明應度近邉火事砌
令紛失欤於日中行事者相残也
永正十六年十二月廿六日
守光之
亜相藤判

右一帖以左近中将 定基朝臣

之本令書写畢

元禄十四年

三月十九日一校了

正三位行権中納言藤[illegible]